

報告会のレポート

15日に、WAM 助成事業の報告会を無事に終えることができました。

当日は県立看護大学の学生の皆さんがボランティアとして会場設営や受付を担ってくださり、その協力のおかげで準備から開会まで大変スムーズに進めることができました。若い学生の皆さんの支えが、会場全体に温かな雰囲気を生み出してくれたように感じています。

当日は快晴の日曜日であったため参加状況を少し心配していましたが、結果として100名ほどの方々にご参加いただき、会場は終始熱心な空気に包まれました。多くの方が最後まで真剣に耳を傾けてくださり、非常に有意義な報告会となりました。

事例報告では、訪問看護ステーション「かえるのほっぺ」「おあふ」「オリーブ」「ベスト」の4事業所が登壇し、それぞれの特色を生かした訪問型伴走支援の実践について具体的に紹介していただきました。実際の支援の現場でどのように子どもや家族に寄り添っているのか、その工夫や試行錯誤が伝わる内容でした。

また、成果だけでなく課題についても率直に語っていただいたことで、各ステーションが現状に満足することなく、より良い支援を目指して課題を共有し、解決を模索しながら利用者にとって最善の支援を提供しようとしている姿勢を強く感じることができました。

基調講演では、県立看護大学教授の川村先生にご登壇いただき、訪問看護師が持つ「全人的支援」の重要性についてお話しいただきました。家族を含めた支援を実現するためには、単に病気や症状だけを見るのではなく、その人の人生や価値観を含めた「人間としての全体像」を理解することが不可欠であり、そのような全人的看護ケアを実践できる専門職が訪問看護師であるという視点が示されました。

そのうえで、不登校の児童生徒やその家族を支援する際に、訪問看護という仕組みが非常に有効であることを、理論的かつ実践的な観点から示していただきました。

パネルディスカッションでは、教育・医療・地域・行政といった各分野の関係機関の方々にパネラーとしてご参加いただきました。座長から「児童生徒の不

登校をどのように捉え、どのような支援が可能だと考えるか」という問いが投げかけられ、それぞれの立場から率直な意見が交わされました。

その中で特に印象的だったのは、小学校の校長先生から「学校の支援にも限界がある」という認識が率直に示されたことでした。学校だけで問題を抱え込むのではなく、他の機関と連携しながら支援していく必要性について語られたことは、とても誠実で重要な発言であったと思います。

実際には、学校として公の場で「できないこと」を語ることは簡単ではなく、多くの場合は何とか学校だけで対応しようとする強い責任感が働きます。しかし、その姿勢だけでは解決できない状況が増えているのも現実です。

だからこそ、学校でできることとできないことを整理し、必要な場面では他機関や地域と連携していくことが重要になります。今回の発言は、既存の仕組みだけでは支えきれない子どもや家庭を、社会全体で支えていく必要性を示す、非常に示唆に富んだものでした。

今回の報告会を通して、不登校やひきこもりの問題は、特定の機関だけで解決できるものではなく、教育・医療・福祉・地域がそれぞれの役割を理解しながら連携して支えていくことの重要性を改めて実感しました。

制度の狭間に置かれ、支援につながりにくかった子どもや家族に対して、訪問型伴走支援という形で新たな支援の可能性が示されたことは、本事業の大きな意義であったと感じています。

今回の報告会が、地域の中で支援の輪をさらに広げていく契機となり、誰もが安心して相談でき、必要な支援につながる地域の仕組みづくりへとつながっていくことを願っています。

小さな一歩かもしれませんが、今日の出会いと対話が、これからの地域の支援のかたちを少しずつ変えていくことを願っています。